

エリアス・カネッティの「生前の遺稿」

——断想をめぐって

北島玲子

はじめに

ドイツ語にNachlassという単語がある。ある人が死後に残すもの（「遺産」「遺品」など）を意味する言葉で、作家のNachlass (der literarische Nachlass)はふつう「遺稿」と訳される。しかしながら近年、Vorlassという言葉が登場した。一般的な意味はDudenによれば、「著名な人物が生前(zu Lebzeiten)公的機関(Institution)に売却ないし寄贈する資料コレクション」¹であり、それが作家に即して使われれば、「作家たちがまだ存命中に(zu Lebzeiten)文学資料館(Literaturarchiv)に委譲する原稿や私的な記録」²を指すことになる。

2023年12月3日開催の成城大学国際編集文献学研究センター主催によるシンポジウム「生前の遺稿——エリアス・カネッティ×カズオ・イシグロ×大江健三郎」³では、センター長の明星聖子氏の提案により、作家のVorlassに焦点を当てることになった。そのさいVorlassは、Nachlass zu Lebzeiten、すなわち「生前の遺稿」という表現を用いて使われた。オーストリアの作家ローベルト・ムージル(Robert Musil, 1880-1942)に*Nachlass zu Lebzeiten*『生前の遺稿』というタイトルの作品があり、これにヒントを得たものである。

本論攷は、20世紀のドイツ語作家エリアス・カネッティ(Elias Canetti, 1905-1994)の遺稿を「生前の遺稿」(Vorlass)という観点から取り上げる。彼は存命中に、未発表の原稿や草稿、出版された作品のヴァリエーションやメモ、未公開の手紙や日記、書評などが掲載された記事や公文書などを蔵書とともにチューリヒ中央図書館(Zentralbibliothek Zürich)に寄贈することを取り決めた。本稿では、こうした「生前の遺稿」を含むカネッティの遺稿⁴を、とりわけその最も重要な構成要素である断想を中心に検証し、彼にとって「生前の遺稿」がどのような意味をもつかを考察する。そのための導入として、まずはムージルの『生前の遺稿』というタイトルに触れることから始めたい。

1. ムージルの『生前の遺稿』

1 <https://www.duden.de/rechtschreibung/Vorlass> (Zugang: 4.8.2024)

2 Dirk Weisbrod: *Prospektiv statt retrospektiv – Einige Gedanken zur Entstehung des Vorlasserwerbs und seine Bedeutung für Literaturarchive*, Frankfurt am Main 2018, S. 19. DOI: <https://www.o-bib.de/bib/article/view/2018H1S19-30> (Zugang: 4.8.2024)

3 本論攷は当シンポジウムにおける口頭発表原稿を加筆修正したものである。

4 チューリヒ中央図書館に収められているカネッティの遺稿には、カネッティ自身が生前決めた「生前の遺稿」以外にも、カネッティの死後、娘ヨハンナ・カネッティによって寄贈されたもの、図書館が買い上げたものが含まれている。

ムーゼルの『生前の遺稿』は1935年12月に出版された。主として1920年代に新聞や雑誌に掲載された作品から30編を選んで手を入れ、1冊にまとめた作品集である。奇妙な味わいの短いテキストが3つのカテゴリーに分類されて収められ、最後に「黒ツグミ」(Die Amsel)という短編小説が単独で配されている⁵。

それがなぜ「生前の遺稿」なのか、「前書き」でその理由が語られている。それによると、遺稿のなかには後世への「大いなる贈り物」(große Geschenke)ともいうべきものもあるが、概して遺稿には、「店じまいのたたき売りや値引きセール」を思わせるところがある⁶。

いずれにせよわたしは、自分で止められなくなる前に、自分の遺稿が出版されるのを阻止する決心をした。そのための最も確実な方法は、自分で生前に遺稿を出すことである⁷。

死んでから勝手に遺稿が出版されないよう、生きていううちに自分で遺稿を出すというわけである。遺稿とは死んだあとに残されるものだとすれば、生前に出すものは遺稿とはいえないはずで、わかったような、わからないような説明⁸であるが、この「前書き」には前段階の草稿が4つ(「前書きI」から「前書きIV」)残っていて、それらを読むと、ムーゼルが遺稿をどのように考えていたかがもう少し具体的にわかる。

たとえば「前書きIV」では、遺稿を4つ(5つと書いているが、実際には4つ)の種類に分類している。まずは、作家や作品のさまざまな面を引き出すことができるような実り豊かな遺稿。2番目は、ノヴァーリス、ビューヒナーの場合のように、遺稿の存在によってはじめて作家が誕生するような遺稿。3番目は特定の作品や、作家の特殊な状況の解明に寄与するような遺稿。スタンダールの『リュシアン・ルーヴェン』の遺稿、すでに精神の闇に包まれていた時期のニーチェの遺稿が例として挙っている。そして最後が「余分な」(überflüssig)遺稿で、ムーゼルは自分の遺稿もそこに入ると記している⁹。もちろん、こうした自己卑下めいた言い方を額面通りに受け取ることはできないが、同じメモのなかでムーゼルは、そもそも自分は遺稿が出版されるような作家なのかと自問している。おもしろいことに、それはいつ自分が死んだかにかかっている、たとえば27歳で死んでいたらそうならうと述べている¹⁰。27歳というのは、ムーゼル

5 29編の小品のうち14編が「イメージ」、11編が「不機嫌な考察」、4編が「物語ではない物語」という枠組みに収められている。単独でおかれた最後の短編小説「黒ツグミ」は、ムーゼルの短編小説の代表作の1編として独立して読まれ、論じられることが多い。

6 Robert Musil: *Gesammelte Werke* in zwei Bänden. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978, Bd. 2, S. 473. 以下ムーゼルの作品からの引用はこの版に依拠する。

7 Ebd.

8 ムーゼル自身、「これで誰もが納得するにせよ、そうではないにせよ」(Musil, Bd.2, S. 473)と付言している。

9 Musil, Bd. 2, S. 965f.

10 Ebd., S. 966.

の出世作である『寄宿生テルレスの惑乱』(Die Verwirrungen des Zöglings Törleß)が出版されて評価を得た時期にあたる。また別の草稿(「前書きⅢ」)には「わたしが今日、本気で遺稿を残す作家の仲間入りをしなければならぬとすれば、完結していない『特性のない男』の作家であろう」¹¹という記述もある。

こうしたことを考え合わせると、ムージルが散逸してしまうかもしれない小品をまとめた書物に、わざわざ「生前の遺稿」と銘打った背景には、作家としての危機感が潜んでいることが窺える。ムージルの代表作はもちろん『特性のない男』(Der Mann ohne Eigenschaften)であり、1930年に第1巻123章が、1932年に第2巻38章が未完のまま出版される¹²。ムージルはその後も『特性のない男』第2巻の続きを書き継いでいくが、完成の目処は立たない。出版社ローヴォルトとの関係はこれまでになく悪化し¹³、ナチスの政権掌握後の1933年5月には、1931年7月から滞在していたベルリンを去ってウィーンに戻るが、ナチスの文化政策はオーストリアにも波及している。『生前の遺稿』の「前書き」でも、ナチズムの画一化政策が揶揄され、それに同調できない作家の孤立状況が指摘されている。

すでに確認したように、ムージルにとって「生前の遺稿」は、不本意な遺稿が出るのを阻止するためのものだということになる。しかしこれも確認したように、そもそも遺稿を云々するには、作家として生き残ることが前提となるにもかかわらず、出版のあてもなく『特性のない男』を書き続けていたムージルは、そのまま忘れられてしまう可能性にもさらされていたのである。こうした状況で、逼迫した経済的理由ゆえに、『特性のない男』の続きではなく、すでに発表したものを、たとえ作品そのものには自負を抱いていたにせよ出版せざるをえなかったムージルの自嘲と屈折した誇りが、「生前の遺稿」というタイトルにはこめられているように思える。

自分の遺稿を「余分な」遺稿に分類したムージルの遺稿は実際には、彼自身が希な例としてあげた人類への「大いなる贈り物」となった。とりわけ『特性のない男』の膨大な遺稿については、それがあってはじめて『特性のない男』は『特性のない男』になったということすらできる。1937年に校正刷に出されながら出版にいたらなかった20の章をはじめとする遺稿抜きには『特性のない男』は語れないのである¹⁴。しかしながらムージルがそもそも遺稿に一種の留保をつけていること、「店じまいのたたき売りや値引きセール」といった表現以外にも、「前書き」の前段階のメモには、「遺稿には不完全

11 Ebd., S. 963.

12 この時点ですでに千頁近くにおよぶ。

13 ムージルはローヴォルト社から月極の前払い金をもらい、ベルリンのムージル協会の援助で生活の資を得ていた。ローヴォルト社からの援助が見込めなくなったムージルを支えるためにウィーンでもムージル協会が設立されるが、その後もムージルは常に経済的困窮との戦いを強いられる。

14 『特性のない男』の遺稿編集については以下の拙稿を参照のこと。北島玲子「可能態としてのテキスト——ムージル『特性のない男』」(明星聖子、納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年、105-127頁)。ただし拙論執筆時には出版されていなかった新しい全集(Robert Musil: *Gesamtausgabe* in 12 Bänden, Hrsg. von Walter Fanta, Salzburg 2016-2021)の『特性のない男』(1巻から6巻まで)、またそれと連動する、ただしまだ完成にはほど遠い Musil online についての叙述はそこには含まれていない。

なもの、できの悪いもの、まだ納得できないものや、納得できないもの」¹⁵が含まれている、あるいは、遺稿には「所有者が死んだあとと公開に付される部屋を訪れるような気まずさ」¹⁶がまとわりつく、といった言葉も見つかることを考えると、『特性のない男』の遺稿を扱うさいには、それが「生前の遺稿」ではないことを心に留めおく必要があるのかもしれない。

2. カネッティの「生前の遺稿」

エリアス・カネッティは1905年、現在のブルガリア、当時はオスマン帝国領の多言語多文化都市ルセ（ルスチュク）でスペイン系ユダヤ人、いわゆるセファルディアの家系に生まれる。1908年にブルガリアがトルコから独立してからも、亡命以前の国籍はトルコのままであった。6歳でマンチェスターに移住、父が急死したあと、ウィーン、フランクフルト、チューリヒを転々とし、大学生活はまたウィーンで送り、そこで作家活動を開始する。しかし1938年、オーストリアがナチスドイツに併合されると、カネッティはパリを経てロンドンに亡命する。戦後はロンドン、のちにチューリヒを本拠とし、1994年8月14日、チューリヒで亡くなる。国籍は最後までイギリスで、1981年のノーベル文学賞もイギリス人として受賞する。母語はラディノ語、多言語話者であった彼は、執筆はすべてドイツ語で行った。ただしドイツ語は英語、フランス語について4番目に身につけた言語である。8歳で母から強制的に短期間で植えつけられたドイツ語で、長編小説『眩暈』、3つの戯曲、大部の評論『群集と権力』、旅のエッセイ『マラケシュの声』、自伝3部作、奇妙なキャラクタースケッチ、カフカ論などのエッセイ、そして大量の断想を書いた。

カネッティは60歳を過ぎたころから遺稿の問題を考え始め、1990年ごろから遺稿の預け先を具体的に探った。いったんはマルバッハの文学資料館に決まりかけたが¹⁷、最終的にはチューリヒ中央図書館に遺稿と膨大な蔵書を寄贈することになる¹⁸。その書類にサインしたのが1994年3月10日（死のほぼ5ヶ月前）、そして5月6日付けの遺言状の末尾で、カネッティは遺稿の取り扱いに言及している。

長編小説『眩暈』(1930-31)以前に書かれたものはどれも、わたしにとって文学的価値はなく、出版してはならない。チューリヒ中央図書館に寄贈する遺稿には、完結した作品として出版してもらいたいような作品はない。死後10年間は、いかなる伝記も刊行してはならない。作者の私的な状況に関する知識なしに価値が認められ

¹⁵ Musil, Bd.2, S. 965.

¹⁶ Ebd.

¹⁷ あとはカネッティが署名するだけという最後の土壇場で、カネッティは遺稿の保管場所としてマルバッハではなくチューリヒを選ぶ。こうした経緯については以下を参照。Sven Hanuschek: *Elias Canetti. Biographie*. München/Wien 2005, S. 682.

¹⁸ カネッティはロンドンとチューリヒの2箇所に蔵書をもっていた。チューリヒ中央図書館は併せて2万冊に及ぶ2つの蔵書を重複本も含めて引き取り、カネッティの希望通り別々に保管している。

るための時間が、書物には与えられるべきである¹⁹。

カネッティは『眩暈』執筆以前にも詩や短篇小説や戯曲を書いているが、遺稿に含まれているそれらを出版してはならない、作品そのものが評価されるべき時間が必要だから死後10年間は伝記を出版してはならない、といった具合に、強い要請が際立つ内容である。また遺稿の閲覧についてもカネッティは制約を設け、プライベートな領域と関係する手紙と日記は2024年8月（死後30年）以降、それ以外の遺稿も2002年8月以降からしか閲覧できないという条件を付けている。閲覧時期も含め、カネッティが遺稿を注意深くコントロールしようとしていたことがわかる。

作品に関する遺稿がすでに解禁され、カネッティが再三執筆中だとほめかしていた小説²⁰や『群集と権力』第2部のめばしい遺稿がなかったことが判明し、日記と手紙²¹（2024年8月14日解禁）の解説作業はこれからだとするなら、カネッティの遺稿でこれまで重要視されてきたのは何かというと、大量の断想である。彼はすでに1930年代の始めから、「断想」(Aufzeichnung)と自ら呼ぶものを書いてきたが、1942年以降、毎日1時間か2時間、断想を書きつけることを日課とするようになる。断想は1行のものから数頁におよぶものまで長さもまちまち、アフォリズム風の考察や自己省察、皮肉な観察や風変わりな夢想、読んだ本の抜粋などさまざまなスタイルが混在していて、それが全部で1万頁を越える。

カネッティは生前、断想の一部を自分で編集した。出版が死後になったものも含めて彼の編んだ断想集は8冊にのぼる。出版順に列挙すれば、『断想(Aufzeichnungen)1942-1948』(1965)、『不毛の崇拜(Alle vergeudete Verehrung)——断想 1949-1960』(1970)、『人間の辺境(Die Provinz des Menschen)——断想 1942-1972』(1973)、『時計の秘心(Das Geheimherz der Uhr) 1973-1985』(1987)、『蠅の苦しみ(Fliegenpein)』(1992)、『ハムステッド補遺(Nachträge aus Hampstead) 1954-1971』(1994)、『断想 1992-1993』(1996)、『断想 1973-1984』(1999)である。これらはカネッティ10巻本作品集²²の第4巻と第5巻に収められているが、断想全体の10分の1ほどにすぎないという²³。

19 Hanuschek, *Elias Canetti*, S. 17.

20 『眩暈』はもともと、8冊の連作小説からなる『狂人たちの人間喜劇』(Comédie humaine an Irren)の1作目として書かれた。その2作目にあたる『死の敵対者』(Todfeind)についてはメモが残されている。

21 遺稿に含まれる手紙はこれまで閲覧できなかったが、カネッティが送った手紙のなかには、受取人が亡くなったあと公開されたものもあり、現在カネッティの書簡集が3冊出版されている。カネッティがパリに住む末弟ゲオルク(Georg, フランスではGeorgesと名乗る)に宛てた手紙、およびカネッティの最初の妻ヴェーザがゲオルクに出した手紙が収められた書簡集(Weza & Elias Canetti: *Briefe an Georges*. Hrsg. von Karen Lauer und Kristian Wachinger. München/Wien 2006)、亡命先ロンドンで知り合い恋人となった画家マリー＝ルイーーズ・フォン・モテシツキエとの書簡集(Elias Canetti: *Marie-Louise von Motesiczky. Liebhaber ohne Adresse. Briefwechsel 1942-1992*. Hrsg. von Ines Schlenker und Kristian Wachinger. München 2011)、友人や編集者などさまざまな人に宛てた書簡集(Elias Canetti: *Ich erwarte von Ihnen viel. Briefe 1932-1994*. Hrsg. von Sven Hanuschek und Kristian Wachinger. München 2018)の3冊である。

22 Elias Canetti: *Werke in zehn Bänden*. München/Wien 1992-2005. 以下、カネッティの作品からの引用は基本的にはこれに依拠する。

23 Hanuschek, *Elias Canetti*, S. 174.

生前出版されなかったそれ以外の断想は2002年8月から閲覧が可能になったので、今ではその一部を活字として読むことができる。ちなみに断想は速記を交えて書かれているため、解読には速記の専門的知識が必要とされる。未発表の断想が読める主な出版物を挙げるなら、まずはこれも遺言に即して死後10年を経て出版された初の詳細な伝記²⁴で、未発表の断想が多く使われている。2冊目は「死」に関する断想を集めた断想集『死に抗する書』(Das Buch gegen den Tod)²⁵であり、未発表の断想が全体の3分の2を占めている。「死に抗する書」というのは、カネッティのいわば幻のライフワークである。彼は生涯にわたって死を憎み、死が不可避のものだからといって死を受け入れ、容認することを徹底的に拒む。1942年には、断想からなる死との対決の書『死者の書』(Das Totenbuch)を書こうと計画する。何度か中断してはまた取り組み、1993年にも再度挑戦しようとするが、結局それは幻の書におわる²⁶。したがって『死に抗する書』と題されたこの断想集は、遺稿から編み上げられたひとつの可能態としての『死者の書』だということもできるだろう。もう1冊は、カネッティがカフカについて書いたテキストを集めたもので、ここにもカフカに関する未発表の断想が収録されている²⁷。

生前未発表の断想には、カネッティ自身が選んで出版した断想には見られないような、プライベートな事柄の記述やアクチュアルな出来事へのきわめて率直なコメントが混じっている。カネッティの断想集は1冊(『蠅の苦しみ』)をのぞいて編年体で編まれているが、個々の断想はアフォリズムが一般的にそうであるように、一種の無時間性を特徴としている。彼自身も断想を日記と区別し²⁸、それをことあるごとに強調もしているが、その区別には多分に流動的なところがあることもすでに指摘されている²⁹。いずれにせよ、日記の解読、出版が待たれるところである。

3. 「遺稿」ないし「生前の遺稿」についての断想

今回カネッティの「生前の遺稿」を考えるにあたり、生前未発表のものを中心にあらためて断想を読んでみて、興味深いことに気づいた。遺稿の断想には、「遺稿」もしく

24 注17初出の Sven Haneuschek: *Elias Canetti. Biographie*, München/Wien 2005. なおこの伝記には日本語訳がある。スヴェン・ハヌシェク『エリアス・カネッティ伝記』(上下)、上智大学出版、2013年(北島玲子/黒田晴之/宍戸節太郎/須藤温子/古矢晋一訳)。

25 Elias Canetti: *Das Buch gegen den Tod*. Mit einem Nachwort von Peter von Matt. Aus dem Nachlass hrsg. von Sven Haneuschek, Peter von Matt und Kristian Wachinger unter Mitarbeit von Laura Schütz. München 2014.

26 断想によるカネッティの死との対決については以下の拙稿を参照のこと。北島玲子「くいかなる死も殺害の糧となる——死をめぐるカネッティの断想——」(『上智大学ドイツ文学論集』52号、2015年、217-242頁)

27 Elias Canetti: *Prozesse. Über Franz Kafka*. Im Auftrag der Canetti Stiftung hrsg. von Susanne Lüdemann und Kristian Wachinger. München 2019.

28 『断想 1942-1948』の「前書き」でも断想が日記ではないことが強調され、その違いに言及している。これについては本稿の「あとがき」で触れる。

29 Vgl. Christoph Eggenberger: *Der Überlebende. Elias Canetti zum hundertsten Geburtstag. Der literarische Nachlass in der Zentralbibliothek Zürich*. In: *Librarium. Zeitschrift der Schweizerischen Bibliophilen-Gesellschaft*, Bd. 48(2005), S. 196. <https://doi.org/10.5169/seals-388790>(Zugang: 4.8.2024)

は「生前の遺稿」についての自己言及的な断想が混じっているということである。たとえば彼がかなり早い時期から「生前の遺稿」を意識していたと思わせる断想がいくつか見られる。

有名なジャーナリストが死んだとき、彼の遺稿には、80年先までの社説が入った箱が12個あることがわかった³⁰。(1947年)

彼は机のコレクションを残した。それぞれの机には、とてつもない作品の最初の文が置かれている³¹。(1952年)

死後のために、何年も先のために、愛した人や憎んだ人すべてに宛てて手紙を書くこと。あるいは死後のために一種の懺悔を用意すること、何年も段階を踏みながら告白を用意すること³²。(1967年)

きわめつけは、上記3つめの断想と同じく1967年に書かれた以下の断想である。この時点でカネッティは61歳だが、彼の死後の状況までがここですでに先取りされているかのようなのである。

とぎれることなく出版されるようにと、遺稿を5年おきに分類する作家。遺稿集が出るたびに、関係者の数が増え、衝撃が深まる。遺稿の公開が巻き起こすセンセーションが、彼の（真の）死後の名声を生み出す。しかしすべては計画ずみのことで、暴露されるものに真実ではないものはひとつもない。予防措置があまりに見事だったので、誰も出版を差し止められない³³。(1967年3月21日)

すでに述べたように、彼は断想の一部を生きているうちに間隔をあけて出版した。彼の死後は遺言にしたがって、彼の遺稿が漸次出版されて話題となり、今後も、たとえば日記や手紙が公開されてそうした状況が続くわけである。

カネッティがこのように早い時期から遺稿に関心を抱いていたことは、作品の生き残りという問題と関係していると考えられることができるだろう。ムーゼルは、自分が27歳で死んでいたなら、遺稿が出されるような作家になっていただろうと述べていたが、カネッティの断想にもそれを思わせるものがある。

30歳でライフワークを書いてしまい、そのあと百歳になる男。彼には自分の名声、

³⁰ Canetti, *Das Buch gegen den Tod*, S. 51.

³¹ Ebd., S. 71.

³² Ebd., S. 120. ただしこの断想は生前編集された断想集『人間の辺境』(Canetti, *Werke* Bd. 4, S. 303)にも収録されている。

³³ 21.3.1967, ZB 23. Zitiert aus Hanuschek: *Elias Canetti*, S. 18. カネッティの遺稿はA4版、厚さ6,7センチの箱に収められている。ZBはNachlaß Elias Canettis in der Zentralbibliothek Zürichの略記号、23は箱の番号。

忘却、再発見を体験する時間がある³⁴。(1960年)

30歳というのはカネッティが『眩暈』を出版した年齢である³⁵。『眩暈』はいまでこそモダニズム小説の傑作と目されているが、発表当時は少数の人（ムージルもその一人）からは高く評価されたが、その後は忘れられる。1946年に第2版が出版され、イギリス・フランス・アメリカで翻訳が出されるなどの反響はあったが、ドイツ語圏で真価が認められるようになったのは1963年に第3版が出てから、つまりこの断想が書かれたあとのことである。つまりカネッティは無名の作家としてイギリスに亡命したのであり、『眩暈』の英訳により作家として認知されるようになり、その地でもう一つの代表作『群集と権力』(Masse und Macht)の執筆に没頭し、それが出版されたのが、この断想が書かれた1960年である。後世まで読まれるような作品を書きたいという願望と、自分に果たしてそれができるのかという懷疑の念をこの断想から読み取ることができる。

自分の作品が生き残るのか、死後まで読まれるのかという問題には、どんな作家も多かれ少なかれ無関心ではいられないだろう。しかしながらカネッティの場合、作品の生き残りという問題は、彼の作品そのものの重要なテーマでもある「生き残り」の問題、ひいては彼の権力論と密接に結びついているのであり、そこにその特異性がある。

4. 作品の生き残りとカネッティの権力論

カネッティの『群集と権力』は一筋縄ではいかない書物である。20世紀という時代を考えるうえで看過できない「群集」と「権力」という2つのテーマに取り組んだこの書は、タイトルからイメージされるような哲学的、もしくは社会学的論考とはおよそかけ離れている。従来の群集論や権力論をふまえ、系統立てた叙述がなされるのではなく、カネッティ自身が長年にわたって集めた身近な現象や個人的体験、歴史的事例、そして古今東西の神話や伝説を素材に、独自の観点から群集、権力、死との対決、変身の問題などが語られていく。そこには論理的な体系構築への意志が不在であり、「教養を積んだ西洋的意識」³⁶が前提とする価値のヒエラルヒーが無視され、現実のものと想像上のもの、人間と動物、生者と死者、生物と非生物の境界があっさり踏み越えられる。

『群集と権力』は見出し語によっていくつかのまとまり（仮に章と呼んでおく。番号は付されていない）に分けられている。そのひとつに「生き残る者(Der Überlebende)」という章があり、「生き残る(Überleben)瞬間は権力の瞬間である〔強調は原文による—筆者注〕」³⁷という一文で始まる。カネッティにとって生き残ることはまさに権力と不可分の関係にある。人間は受胎にさいしてすでに生き残る者であり、生存のために動物を殺し、多くの他者や死者を自己を養う糧として利用する。それゆえカネッティの考察において生き残ることは、死ぬのは他者であって自分ではないという満足感や勝利の意

³⁴ Canetti, *Das Buch gegen den Tod*, S. 96.

³⁵ 『眩暈』が執筆されたのは1930年から31年にかけてであるが、出版されたのは1935年になってから。

³⁶ Canetti, *Werke* Bd.10, S. 145.

³⁷ Canetti, *Werke* Bd. 3, S. 267.

識と結びついている³⁸。カネッティにとって権力者の端的なイメージは、無数の死者のもと、戦場でたったひとり生き残る者であり³⁹、権力者はそのために他者を殺す。「殺すことは生き残ることの最も卑劣な形式である」⁴⁰。他者を自らのうちに取り入れて消化し作品と化す作家、世界を言語によって把握するために個別的なものを語りの秩序に押し込める作家もまた権力行使から逃れることはできない。

生き残ることがつねに他者の死を内包しているとすれば、そこから「どうすればいいのだろう。生き続け、にもかかわらず勝者にならないためには？」⁴¹という倫理的な問いが出てくるのはある意味では必然である。じっさいカネッティは「生き残る者」の章の最後で、スタンダールを例に、生き残ることからその棘を取り去るような文学の生き残り、「文学の不死性」について語っている。

カネッティにとってスタンダールは、宗教が課す束縛や宗教が約束する救済といった観念から自由な、徹底した現世主義者である。彼は此岸の生を享受し、自分が深く感じたもの思考したものについて語るが、それらに「うさんくさい統一」⁴²を与えてまとめあげることはなく、ひとつひとつのものをそのままに作品に留める。権力者は自分が死ぬとき、生きていたときと同じく周囲のものを巻き添えにして殺すが、スタンダールは生きていたときにも殺さなかったように、死んでからも殺さない。彼は自分と同時代を生きた人びと、彼の目に触れたものを、それが偉大なものであれ、卑小なものであれ、作品のなかに具体的な形で残し、生きていた者への糧として提供しつづけるからである。それゆえスタンダールはカネッティにとって、権力者の「反対像」(Gegenbild)となる⁴³。

ここで注目したいのは、カネッティが、スタンダールは「百年後にたくさんの人間が自分の作品を読むだろうと確信していた」⁴⁴と述べたうえで(カネッティらしく、その根拠もしくは典拠は示されていない)、それを「文学の不死性」と結びつけていることである。つまりカネッティによれば、自分の死後に作品が生き残るという確信をもっているスタンダールは、それゆえに「今は(…)生き残ろうとは思わない〔強調は原文によ

38 『群集と権力』における生き残りには、アウシュヴィッツの生き残りへの視点、つまり生き残った者の罪の意識の問題が欠落しているとの指摘がなされている。Vgl. Sven Hanschek: „Viele sind eitel, aber wenige dazu auserwählt.“ Elias Canettis Überlebensstrategien. In: Sven Hanschek (Hg.): *Der Zukunftsfette. Neue Beiträge zum Werk Elias Canettis*. Wrocław/ Dresden 2007, S. 228. Birte Hewera: Auschwitz überleben. Macht und Ohnmacht bei Jean Améry, Primo Levi und Elias Canetti. In: Falko Schmieder(Hg.): *Überleben. Historische und aktuelle Konstellationen*. München 2011, S. 155.

39 ただしカネッティは『群集と権力』のエピローグ「生き残る者の終焉」において、原子爆弾の発明によって、権力者がただひとり生き残ることが不可能になったと指摘している。「あらゆる者が生き残るか、誰ひとり生き残らぬかであろう」(Werke Bd. 3, S. 558)。

40 Canetti, *Werke* Bd. 3, S. 267.

41 Canetti, *Werke* Bd. 4, S. 185. なお『群集と権力』にはアウシュヴィッツの生き残りの観点が欠如していることを指摘したハムシュク(注 38 参照)は、カネッティが断想や『蜂谷医師の日記』などではホロコースト、ヒロシマ、ナガサキの問題に触れていることを付け加えている。Vg. Hanschek(2007), S.228. また須藤温子が指摘しているように、断想では『群集と権力』とは異なり、生き残ることそれ自体に伴う罪悪感が問題にされている(須藤温子『エリアス・カネッティ 生涯と著作』、月曜社、2019年、181頁)。

42 Canetti, *Werke* Bd. 3, S. 328.

43 Ebd., S. 329.

44 Ebd., S. 328.

る——筆者注]」⁴⁵。権力者にとって重要なのは「現在の生き残り」であるが、作家にとっては「未来の不死性」が問題であり⁴⁶、そのために作品は生き残らなければならない。そのような生き残り、自分一人のための生き残りではなく、他者のための生き残り、過去から連続と蓄積されてきた人類の「遺産」に追加されるべき作品としての生き残り、それがカネッティにとっての「文学の不死性」であり、そのような作品を残すことによって、書くことの権力はそれとは反対のものとなるという。

カネッティはある対談で、次のように述べている。

すでに若いころからわたしは、存続に耐えない書物は出版しないと決めていた。だから少ししか出版しないし、出版を決意するまで長いあいだためらう。(…)わたしの最大の願いといえば、百年経っても読まれることである。今では滑稽に響くかもしれないが、わたしは本気でそう考えている⁴⁷。

この発言は、最初に紹介した遺言状のくだりとも符号する。つまりカネッティが、存続に値しないと自ら考える作品の出版を禁じ、プライベートな領域に触れる伝記の出版を10年間禁止したのは、作品そのものが評価され、それが後世まで読まれることをカネッティが望んだからであった。「生前の遺稿」という形で遺稿をコントロールし、遺稿の扱いを閲覧時期も含めて注意深く定めたのは、そのための事前措置、作品が作品として生き残るための戦略であったといえる⁴⁸。

本論攷の冒頭で Vorlass の一般的な意味と、作家に特化した使い方を紹介したが、そのどちらも委譲先がある種の権威を付与された機関 (Institution, Literaturarchiv) であることが改めて目を引く。もちろん生前に、家族や友人に「遺稿」を託しておくということもありうるが、遺稿を収集し、保存し、研究し、さまざまな目的のために供するという制度が確立している現在、程度の差はあれ著名な作家の場合、「生前の遺稿」の委託先は文学資料館や大学や図書館といった一定の知的権威をもつ機関ということになる。

カネッティの権力論では、フーコーなどとは異なり、権力を支える、あるいは権力構造そのものを体現している公的機関が直接考察の対象にはなっていない。しかし「生前の遺稿」はアーカイヴという制度、あるいはアーカイヴという場といやおうなく結びついている⁴⁹。興味深いことにカネッティは遺稿の委託先を決めるさい、大学のような「客観的な機関」なら遺稿を「冷静に考え抜かれた方法で」管理してくれるだろうと考えた

⁴⁵ Ebd., S. 329.

⁴⁶ Stefanie Wieprecht-Roth: *Die Freiheit in der Zeit ist die Überwindung des Todes. Überleben in der Welt und im unsterblichen Werk. Eine Annäherung an Elias Canetti*. Würzburg 2004, S. 198.

⁴⁷ Canetti, *Werke* Bd. 10, S. 166.

⁴⁸ 厳密な閲覧規定や制約を課すことはカネッティにとって諸刃の剣であり、作品ごと忘れられる危険性も孕んでいたとハヌシェクは指摘している。Vgl. Hanuschek (2007), S. 229.

⁴⁹ 作家の側からすれば作品の生き残りを保証してくれるのがアーカイヴであるが、図書館や文学資料館の側からすれば、遺稿を含めた作家のコレクションを持続的に充実させる必要がある。近年「生前の遺稿」が増えた背景には、収集する側の事情が大きく働いていることが Dirk Weisbrod の論文 (注 2) からわかる。

という⁵⁰。あらゆる形の権力をたえず軽蔑したカネッティが、こうした機関の客観性を信頼していることにハヌシェクは注意を促している⁵¹。カネッティ自身が意識していたかどうかはともかく、作品の生き残りを求める願望は、こうした点でも生き残ることに付随する権力の問題と無縁ではない。

おわりに——断想と「生前の遺稿」

カネッティは最初の断想集『断想 1942-1948』の前書きで、それまでも折りに触れて書いていた断想を、意識的に日課にするようになった経緯に触れている。『群集と権力』という大著に取り組んでいた彼は、その重圧から逃れるために、「頭に浮かんだことを」毎日書き留める決心をした。「自分のためだけに」、「生に留まり、窒息しない」ためだけに書き記していた断想は、やがて「わたしの生の特別な部分」⁵²となり、カネッティはその後、死ぬまで断想を書きつづけた。さまざまなジャンルに手を伸ばしたカネッティが、生涯を通して書いたのは断想であり、カネッティの未公開の遺稿をふまえて詳細な伝記を書いたハヌシェクは、「カネッティの主著は『眩暈』でも『群集と権力』でもない。彼の比類ない存在を包み込む作品は断想である」⁵³と評している。

しかしながらカネッティは遺稿の大きな構成要素である断想について、それを編集し出版することを、断想そのものの性質と矛盾するものとも考えていた。カネッティが断想と日記の違いを強調していることはすでに述べたが、「生の連続性を示す」⁵⁴役割を担い、一種の「規則正しさ」⁵⁵を必要とする日記と対比させて、断想は以下のように特徴づけられている。

それに対して断想は矛盾や自発性を糧とし、予測可能なものはなく、何も予期できない。完成してはならない、あるいは完結してはならない。断想間の飛躍が最も重要である。飛躍は人間のさまざまに異なる部分から発し、多方向を同時に目指し、方向性の不一致を強調する⁵⁶。

世界を硬直したシステムに押し込めることを拒むカネッティにとって、矛盾や予測不可能性を孕み、しかも相互の連関を欠いた断想を書きつづけることは、思考を何らかの統一的なまとまりに収斂させないための方法そのものであった。

カネッティが「自分のためだけに」書いていた断想を断想集として最初に出版したのは1965年であり、その後は順次断想集が出版される。そのさいカネッティは断想を繰

50 Vgl., Hanuschek, *Elias Canetti*, S. 682.

51 Ebd.

52 Canetti, *Aufzeichnungen 1942-1948*. München 1965, S. 8.

53 Hanuschek, *Elias Canetti*, S. 172.

54 Canetti, *Aufzeichnungen 1942-1948*, S. 8.

55 Ebd., S. 9.

56 Ebd.

り返しふるいにかけて、入念に手を入れた⁵⁷。また未発表の断想についても、それを繰り返し再読しては「日記」に分類し直した節があり⁵⁸、「生前の遺稿」として自己の管理下においていたといえるだろう。このようにカネッティは、もともとは他者に読まれることを想定しないで書いていた断想、思考の偶然性・自発性に委ねられた断想に、作品として生き残るための措置を多かれ少なかれ施したわけである。

しかしながら生前未発表のある断想のなかでカネッティは、これらの膨大な断想が読まれないまま消えてしまう可能性を夢想してもいる。

この何十万もの書き散らされた文すべてが散逸し、消え去るという希望が存在している。それは希望というより起こりうる可能性であろう。というのも彼が突然倒れて死に、ずさんな遺族の誰かが無数のノートを投げ捨てるかもしれないではないか？ この可能性、断想の運命の不確実性が彼の文に尊厳を与えている。出版することによって彼が救出するものだけは、その尊厳を失ってしまう⁵⁹。

結局カネッティは断想を不確実な運命に委ねることができず、自ら編集し出版しただけではなく、「生前の遺稿」として残すことで、断想がすべて散逸して消え去るというある種のユートピア的可能性を放棄したのである。

付記

2023年12月3日のシンポジウムでの発表後に得た情報によれば、カネッティの新しい全集版(12巻本)が2025年の秋から刊行される見込みである。1年に1巻ないしは2巻ずつの刊行が予定されている(詳細はまだ不明)。2025年刊行予定の『救われた舌』(3冊の自伝の1冊目)および『マラケシュの声』では、カネッティが出版時に削除した部分が読めるようになっているという。また2026年秋刊行予定の巻には戯曲が収められ、そこにはこれまで未発表の1950年ごろに書かれた『猿のオペラ』の台本が含まれるという。

文献一覧

Canetti, Elias: *Aufzeichnungen 1942-1948*. München 1965.

Canetti, Elias: *Das Buch gegen den Tod*. Mit einem Nachwort von Peter von Matt. Aus dem Nachlass hrsg. von Sven Hanschek, Peter von Matt und Kristian Wachinger unter Mitarbeit von Laura Schütz. München 2014.

57 Irmgard Wirtz はカネッティの自己検閲を経たこうした断想に対して、「着想の綺想曲^{カネッティ}」である未発表の断想のもつ「未検閲」であるがゆえの特徴を強調している。それらは「より辛辣であると同時に滑稽」であり、「多声性と思考の野放図さ」、「異質性の共存と広がり」を有している。Vgl. Irmgard Wirtz: *Der Tod, die Familie und der Kegeljunge. Ein Themenkomplex aus den nachgelassenen Aufzeichnungen*. In: (Hg.) Heinz Ludwig Arnold: *Text und Kritik*. Heft 28, *Elias Canetti*. München 2005, S. 11f.

58 Hanschek (2007), S. 229.

59 23.7.1967, ZB 23. Zitiert aus Hanschek, *Elias Canetti*, S. 187.

- Canetti, Elias: *Ich erwarte von Ihnen viel. Briefe 1932-1994*. Hrsg. von Sven Hansushek und Kristian Wachinger. München 2018.
- Canetti, Elias: *Prozesse. Über Franz Kafka*. Im Auftrag der Canetti Stiftung hrsg. von Susanne Lüdemann und Kristian Wachinger. München 2019.
- Canetti, Veza & Elias: *Briefe an Georges*. Hrsg. von Karen Lauer und Kristian Wachinger. München/ Wien 2006.
- Eggenberger, Christoph: Der Überlebende. Elias Canetti zum hundertsten Geburtstag. Der literarische Nachlass in der Zentralbibliothek Zürich. In: *Librarium. Zeitschrift der Schweizerischen Bibliophilen-Gesellschaft*, Bd. 48(2005), S. 196. <https://doi.org/10.5169/seals-388790>(Zugang: 4. 8. 2024)
- Hanushek, Sven: *Elias Canetti. Biographie*. München/Wien 2005. [日本語訳: スヴェン・ハヌシェク 『エリアス・カネッティ伝記』(上下)、上智大学出版、2013年(北島玲子/黒田晴之/穴戸節太郎/須藤温子/古矢晋一訳)]
- Hanushek, Sven: „Viele sind eitel, aber wenige dazu auserwählt.“ Elias Canettis Überlebensstrategien. In: Sven Hansushek (Hg.): *Der Zukunftsfette. Neue Beiträge zum Werk Elias Canettis*. Wrocław/ Dresden 2007, S. 225-235.
- Hewera, Birte: Auschwitz überleben. Macht und Ohnmacht bei Jean Améry, Primo Levi und Elias Canetti. In: Falko Schmieder(Hg.): *Überleben. Historische und aktuelle Konstellationen*. München 2011.
- 北島玲子「可能態としてのテキスト——ムージル『特性のない男』」(明星聖子、納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年、105-127頁)。
- 北島玲子「〈いかなる死も殺害の糧となる〉——死をめぐるカネッティの断想——」(『上智大学ドイツ文学論集』52号、2015年、217-242頁)。
- Musil, Robert: *Gesammelte Werke* in zwei Bänden. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978.
- 須藤温子『エリアス・カネッティ 生涯と著作』、月曜社、2019年。
- Weisbrod, Dirk: *Prospektiv statt retrospektiv – Einige Gedanken zur Entstehung des Vorlasserwers und seine Bedeutung für Literaturarchive*. Frankfurt am Main 2018. DOI:<https://www.o-bib.de/bib/article/view/2018HIS19-30>(Zugang: 4.8.2024)
- Wieprecht-Roth, Stefanie: *Die Freiheit in der Zeit ist die Überwindung des Todes. Überleben in der Welt und im unsterblichen Werk. Eine Annäherung an Elias Canetti*. Würzburg 2004.
- Wirtz, Irmgard: Der Tod, die Familie und der Kegeljunge. Ein Themenkomplex aus den nachgelassenen Aufzeichnungen. In: Heinz Ludwig Arnold(Hg.): *Text und Kritik*. Heft 28, *Elias Canetti*. München 2005, S. 18-30.

Pre-mortem Bequest in the Case of Elias Canetti: Focusing on His Reflective Notes

Reiko Kitajima

On March 10, 1994, five months before his death, Elias Canetti (1905-1994) signed the donation of his posthumous papers to the Zurich Central Library. He also stipulated conditions for their handling of them, including the timing of their access. He banned reading his manuscripts until 2002, letters in his hand and his diaries until 2024, and publishing his unpublished early works. At the same time, he forbade the publication of biographies for ten years after his death, for his work to be read as a work, without knowledge of his private sphere. He tried to exercise careful control over his posthumous papers. The most important part of his manuscripts, more than 10,000 pages of reflective notes, a tenth of which were published before his death, has been available to view since 2002. Interestingly, among them there are some notes about the posthumous manuscript or pre-mortem bequest. Reading them shows that Canetti had been thinking about the posthumous papers from an early stage. His interest in them is connected to his desire for literary survival. For Canetti, survival is inseparably linked to power. ("The moment of survival is the moment of power".) On the other hand, however, he strives for "literary immortality", in which survival loses its sting and the power of writing changes to its opposite. For Canetti, it is important that his works survive not for the present and himself, but for the future and others. Canetti's decision to place his own posthumous papers under his control is a measure to ensure that his work is valued as work itself and lives on for future readers. But it also means that Canetti abandoned his utopian dream that all his notes would dissipate and disappear.